

南丹市の地域社会と佛教大学の 地域連携活動に関する研究

高御堂 厚

【抄録】

平成元年より30年以上、観光による地域の活性化を目指してきた京都府南丹市美山町の今と20年後の未来を見据えた課題を顕在化するために地域住民からヒアリングを行った。観光課題である消費単価の低迷、地域内調達率の低迷、少子高齢化、過疎化による地域の弱体化などを踏まえての議論となった。

観光でまちづくりの可能性を探ることの重要性の提議や村の暮らしや景観を守ることが観光資源を守ることの意味、美山は既にSDGsを実践している社会、生きがいが生業になることが観光、観光は地域にある資源を形にすること、中高生にとつたアンケートを基に未来を考えることが望ましいなどの意見が出された。共通課題として、地域住民が観光に対する認識が低いことがあげられた。大学との協働により美山町の活性化に寄与したい。

キーワード：観光でまちづくり、観光に対する温度差、子供たちの未来への思い、DMO、地域経営の視点

1. はじめに

佛教大学は2004（平成16）年に旧美山町と大学との間で地域連携協定を結んだ。学外をもうひとつのキャンパスと位置づけ、より実践的な研究、教育を目指し「地域で学ぶ」「地域に学ぶ」を基本理念とした。包括的連携のもと、教育、福祉、文化およびまちづくり等の分野において相互に協力し、地域社会の発展と人材育成を図ることが目的とされた。

過疎地である美山町では急速な少子高齢化の中で、コミュニティーの弱体化、農地林地の荒廃、経済の衰退、伝統文化の消滅等々の課題が山積しており、産官学公連携、大学との連携の中で新たな解決策を模索してきた。しかし、問題は複雑で様々な関係者の利害関係、旧村意識、まちづくりのベクトルの違い、経済力、人材力等がその解決を阻んでいる。

この研究では、美山町の産業の柱でもある「観光」と「まちづくり」という視点でおこなった美山町の20年先の未来の姿について各分野で活躍されている美山町の方々の意見をまとめることで今後の、研究の指針となる基礎資料としたい。

2. 美山町概要

美山町は、1955（昭和30）年に大野、宮島、鶴ヶ岡、平屋、知井の旧5ヶ村が合併して誕生し、2006（平成18）年に園部、日吉、八木、美山の旧4町が合併して南丹市が誕生した。町域面積340.47 km²に約3,700人が生活している。96%が山林で由良川の源頭部を抱えている。京都大学芦生研究林が代表する学術的にも貴重な自然が残り、農山村の原風景を象徴するかやぶきの里（国の重要伝統的建造物群保存地区：1993（平成5）年選定）が訪れるものに日本のふるさとを想起させる。

2018（平成30）年には美山町全域を含む京都丹波高原域が国定公園に指定され、豊かな自然景観とかやぶきの里の町並みの風景が評価された。

2015（平成27）年の高齢化率は46%、人口は3,800人で人口問題研究所の推計によると2030年には高齢化率60%、人口は44%減少することになっており、急激な過疎化は止めることのできない現実として地域に突きつけられている。

3. 美山町の観光の現状と課題

1989（平成元）年に都市と農村の交流を目的として旧美山町役場にまちおこし課が設置された。また、同年、宿泊施設、レストラン、多目的グラウンド、キャンプ場、会議室等を備えた美山町自然文化村を開設し都市と農山村の交流を推し進めることで地域の雇用促進、文化の発信、スポーツの振興をおこなってきた。当初20万人程度といわれていた観光入込客は、2003（平成15）年には70万人を超え、2019（平成31）年にはインバウンドの急増により100万人近くまで押し上げた。

美山町の観光は、かやぶきの里が牽引してきた経過があり、現在でもその存在は大きく、様々な観光商品の造成に大きな影響を与えている。30年に渡る美山町の地域活性化の実績が評価され、近年、農水省「ディスカバー農山漁村の宝」の優良事例に選定、エコツーリズム大賞優秀賞、ツーリズムEXPOアワード地域部門賞を受賞した。

観光の課題として挙げられるのは、消費単価の低迷である。2019（平成30）年度の消費単価は1000円前後で京都市のそれと比較すると22,000円で約1/20に留まっていることは、観光による地域の雇用促進や給与水準の向上に果たす役割が低いということになる。売上実績の向上だけのものさしではなく、地域にお金が落ちる、即ち地域内調達率の向上が必至で、地域に対する誇りや愛着、観光で稼ぐという意識の向上無しでは実現できない課題である。

このような課題を解決するため、2017（平成29）年に観光庁が推進する日本版DMOの設立に呼応し一般社団法人南丹市美山観光まちづくり協会（登録DMO）が設立された。これにより美山の観光を稼げる観光産業に育成する事業が始まり、現在その取り組みが地域と連携しながら

推し進められている。

4. 地域住民の聞き取り調査まとめ

美山町住民の意見を踏まえ佛教大学との協働で問題を解決してゆくための調査項目の洗い出しという視点で2020（令和2）年2月に美山町内において住民からの聞き取り調査を行った。対象者は、地域の自治組織である大野振興会長、美山町振興会連絡協議会会長を歴任された山口恒一氏（60代）、かやぶきの里北村かやぶき保存会長の中野忠樹氏（60代）、宅地建物取引業、宿泊事業をおこなうニシオサプライズ代表取締役の西尾晴夫氏（50代）、女性の地域活動ムラガーレの代表、里の公共人の古北真里氏（40代）、美山DMO事務局長の高御堂和華氏（20代）の5名の方々の意見から美山の将来を想起できる「美山の未来の姿」をまとめた。

聞き取り調査の抜粋

高御堂厚（話題提供者）～観光でまちづくりの可能性を探る

美山町の課題の1つは、多くの農山村地域が抱えている極端な少子高齢化が美山町で急速に進んでいるということです。そのことが教育、医療、福祉であるとか、地域の農林水産業をはじめ経済がなかなかうまく動かなくなっていく原因のひとつとなっています。また、コミュニティーも維持できなくなり、広い地域の中で社会資本の整備ができず学校も統廃合を繰り返し住む場所も限られてしまいます。公共サービスであるバスも通らなくなり、水道施設も老朽化し、人口が減る中で起きてくる課題というのはいくつもあると思います。

そこで、観光による地域活性化の可能性を探っています。観光入込客は、外国人が2012（平成24）年以降、増えていますので、現在100万人に迫っています。観光消費単価は1000円前後を低迷し京都市内と比較すると20分の1の消費単価です。しかし、人が来ることで流入人口が増え消費が増加、雇用促進につながり、そこで住みたい人が住めるような状況を生み出すことを観光という手法でできないのかなと考えます。

中野忠樹氏～農村の暮らしや景観を守ることが観光資源を守ること

今、観光ってなんや、観光資源ってなんやというようなこと考える上でも、今の状況というのは本当にみんなが立ち止まって真剣にそういうことを考えるいい機会を与えてくれるんじゃないかと思います。

かやぶき民家の伝建地区に住んでいる私たちが景観の値打ちや観光資源に気付いていたわけはありませんが、景観を守ることで人が来てくれて、都市との交流が図れて観光という新たな生活の糧が得られるのであればという思いがありました。ですので、人が来てくれるには景観を守らなければならないと思い、唯々、景観を守ることを最優先に取り組んできた26年間というこ

とです。

景観を守るってなんやということで、私たちはいろいろ考えたわけですけども、景観というのは暮らしが支えているもので、農村の暮らしを守っていかないと本当の景観は残らないと。だから、お店の立ち並ぶ観光地にはしないということでお店の数に制限を加えて、景観優先の26年間だったと。それがあある意味、災いをしたといいますか、十分活用できなかったということもありまして、後継者が育っていないと。空き家も増えておりますし、一人暮らしの方も増えています。

ただ、大筋の、農村の暮らしを守らないと景観も守れないというのは基本的には正しいというふうに思っています。かやぶきの里の伝建地区は今、年間20数万人の来場者数でずっと推移していますが、それは、うちの村が迎え入れる観光客数の限界の人数だと思っています。

西尾晴夫氏～つながりの社会、美山は既にSDGsを実践している社会

私は美山と美山のかやぶきは世界を変えるというふうに考えています。なぜかといいますと、美山にはかやぶきが500軒以上あり、隣接する日吉町を加えると1089棟あります。これは私が運営する会社で2008（平成20）年に調査をしました。なぜ昔の人がそこまで、機械も石油もない時代にそんな建造物をつくったのかということをお皆さんに疑問を持っていただきたいのです。

また、かやぶきは美山では頼母子講という組織で維持されてきました。大体30軒ぐらゐの家でチームを組みまして皆さんでカヤ刈りをする、相談をして、今年はそのたら、この家とこの家を直そうといったときに30軒の家が一気に材料を持ってきたり手伝ったりして、順番にそれを行っていました。それで、この中で私はあの人にカヤをこれだけ借りている、私はこの人にこれだけカヤを貸している関係が生まれ、これは、実はブロックチェーンの原型なんですよ。中央に人がいて管理してるのでなくて、みんなでの貸し借りをみんな把握してるというのは、既に何百年も前に日本人というはブロックチェーンを開発してたんですね。そして、美山のかやぶきを見ていただいたら分かりますけれども、極端に小さい家もないし、極端に大きい家もない、大体粒ぞろいなんですよ。ていうのは、みんな手伝って、みんな平等に豊かになろうという、そういう意識の表れなんですよ。

これから、美山で事業を行っていくにあたって、事業の3要素というは、人、物、金っていうふうにいわれますけれども、昔の美山の人、先ほど申しましたように、労力を物、不動産に投資して社会をつくってました。ですけども、現在にあつてお金という一つアイテムができたわけなんです、残念ながら人という部分で非常に減りつつあります。ですけども、物、不動産、山、畑、美しい景観も含め、また情報、美山が持っている歴史ですね、そこにさらに投資をしていって磨きをかけていくっていうことをわれわれは、過去の先人がやってきたわけですから、引き続き違う形で投資し続けるということが必要であるというふうに感じています。

国連はSDGsというのを上げてはいますが、美山はとくに数百年前にそういう社会を

つくっていた、みんな平等に豊かになろうという社会ですね。それが美山の光であって、この美山の光が世界に伝われば貧困もなくなりますし、世界を変えるというふうに私は考えています。

古北真里氏～生きがいが生業になる

美山の観光の売りになっているものは、ただ単に自然や町並みのように見えているものを見せるだけじゃなくて、美山で、暮らしている人がいて、暮らしている人が育んできたものです。自分たちの暮らしが評価されることで生きがいを感じ、観光資源となり生業となります。また、これ以上来てもらったら、今見せている良さが守れなくなってきてしまうのも事実なので、それを守りながら、いかにして美山町全体に観光による恩恵を分配していくのかとか、そういうことも考えなければならないんです。

一つ一つのことが全部、観光から切り離されているわけではなくて、全部がつながって1つの美山の今の形がずっと維持されてきているのだと思うので、美山の観光というのを考えるときにも、いろんな視点を持って、いろんな視点の方をうまく巻き込んでいけるようにすべきです。

山口恒一氏～地域にある資源を形にする

現在、観光が地元の産業に相乗的な効果をあげるまでにはなかなか行っていない。年に1回のイベントをきっかけに農家の方が新しい食品を作ったり、そういう動機付けとかになって、いろんなものが作られる。地元の方の活性化という面では有効だったんですけども、それを生活の生業にするところまでは、なかなか難しいということです。また、今も高齢化で後継者不足の話がありますけどもそれこそ、たくさんの地元の食べ物がある昔は提供されていましたが、どうしてもそれも、なかなかできなくなって、お客さんは来てはるんですけども、売る物がだんだんなくなって、そんな状況に来ていています。

そういうことが、観光で稼いでいるわけではないけども、少し、ちっちゃな稼ぎにはなると、それを生きがいややりたいと思ってくださって、いろんなことをされる。それで全てのなりわいになるわけじゃないですけども、地元の方の生きがいには少し関わってるかなと思う。

難しいのは、観光が一部の人のものでしかないということは痛切に感じます。観光を自分のこととして、みんなが考えられるようになるにはどこの集落でも観光資源が何かあると思うんですね、文化財、お寺なり神社なりを生かして人が来てもらえるとかということです。ちっちゃな積み重ねが、美山全体で、どの集落もそんなことを考えるようになったら、美山町全体が活気付くんじゃないかなというふうに思います。

高御堂和華氏～中高生にとってアンケートを基に未来を考えることが重要

私は大学は外に出て、帰ってきてUターン扱いをしていただいけるかどうか分からないですけど。帰ってきて思ったのは、住んでるときは本当に自分の住んでいる所はただの田舎という

認識しかなくて、帰ってきて働き始めて、いろんな方にお話を聞いて、この京都のへき地に1000年以上続く歴史があって、先ほどのお話にもあったように石田家住宅のような古い農家民家がまだ残っていて、それをなおかつ地元の方が話せるっていう地域は本当に珍しいですし、稀有なものだなというふうに感じて、すごく感動したんですね。帰ってきて観光という手段で、まちづくりも関わられたらと思って、この仕事をしています。

まちづくりもいろいろな仕事をする中でお伺いをしているものは、美山町はエコツーリズムという形で長年、観光させてきていただいている、地域資源の掘り起こしもされて文化的な書物も整理をされてきていますが、それが結局、美山に来てくださった方に届かない、手に届く形になっていないというのが大きな課題としてあって、だから、これまであまり変わってこなかった部分もあるのかなというふうに感じてDMOができたのかなというふうに理解をしています。

地域にある資源を形にしてお客さまに届けていくっていう仕組みづくりが、この先20年間、地域の支援をしていくにあたって必要なことなんだなというふうに思っています。

アンケートで採っていただきたいのは、これからの美山町を一緒につくり上げてくれる可能性のある、美山町にいる中高生に、美山町で働くということに対して、美山町という自分の町に対してでもいいんですけども、意識調査みたいなことをしていただけると、私はその調査の結果を見てみたいというふうに思っています。

現に今、少子化もすすみ、20代の方も少ないですし、どんどん減っていく中で、働かずとも美山に何らかの形で関係をしてくれるような、都会に住みながら美山と関係を持ってくれるような、若い世代の方の確保というものがすごく必要になってくると思うので、その仕組みづくりの基礎データとしてのアンケートを今回、採っていただくのであれば、そういったものを要望したいなと思います。

5. まとめにかえて

農山村、中山間地域の活性化は、長年全国で様々な取り組みが行われてきた、観光は地方創生の切り札として推進され観光立国推進法のもとに施策がおこなわれている。今回、登録DMOを組織し観光の産業化を目指す京都府美山町において、「美山町の20年先の未来の姿について」思うところを地域の方々に語っていただくことで課題を顕在化させた。観光で稼ぎ暮らす地域とは、観光がもたらすものは何か、若者たちに問いたい。

ところで、地域で暮らしたいと思えることはどんな「物差し」があるのか。例えば、やりがいのある仕事、それとも子育て教育の環境、豊かな自然の中でのくらし、人と人とのつながりが実感できる生活、相互扶助の社会といったことが想起できる。その人にとっての物差しで大切度の違いを認識することはまちづくりには重要となる。

そして、Iターン者やUターン者、地域に住み続ける人の物差しは違うものであるかもしれ

ないということを前提に、それぞれが自らの理想のライフスタイルを実現できる地域とするには、観光ビジョンの策定や地域の誇りを形（商品）にするための地域経営、観光地経営の視点が不可欠である。

参考文献・資料

- 一般社団法人南丹市美山観光まちづくり協会 2019（令和元）年度総会資料
京都府商工労働観光部 2018（平成30）年度京都府観光入込客調査報告書 2019（令和元）年7月
南丹市 人口・世帯数集計表・年齢別人口集計表 2020（令和2）年9月
国立社会保障・人口問題研究所 日本の地域別将来人口推計
美山町 京都府美山町における村おこしの取り組みと課題 第9回改訂版 2004（平成16）年10月

（たかみどう あつし 共同研究嘱託研究員／美山ふるさと株式会社常務取締役）